

『組写真』に関する一考察

前羽 光雄



“単写真から組写真へ”、一歩前への取り組みを目指して、選抜展『それぞれの山』を起ち上げて16年余り、組写真展として14回の開催を重ねてきました。この間、実行委員長として取り組んできたことから、紙面をお借りして「『組写真』に関する一考察」としてまとめてみました。

【組写真に決まり事はあるのか】 山と関わりのある組写真として、テーマが先か後か、理想は前者。組枚数が少ない場合は大きなテーマよりも小さい(単純)テーマが創り易い。山頂や稜線に拘らない、標高の高い山に拘らない、あれもこれもと欲張らずマイナス思考でいきたい。事前のロケハン、シミュレーション、現場でのひらめき等々、感性を研ぎすまし失敗を恐れず何を撮りたいか、何を表現したいか、組写真にこれといった決まり事はないと思っている。自分の想い、それを一枚の写真で感じ取っていただくのは難しいが、複数枚の構成でそれを感じ取っていただけるような作品、それが組写真。何枚組で構成するのは自由であるが場合によって制約はある。

連作とは、関連した写真を並べた作品。色で見せる、季節で見せる、定点撮影等、さまざまな表現方法がある。組写真と連作写真の解釈は曖昧であると思う。

私達が撮る被写体は自然の中にあり、気象条件等により日々変化し生きている。同じ場所から同じように撮れるとは限らず思うようには撮らせてくれない。時間待ちは当たり前、半日のこともある。

【組を意識して・・・】 組写真と単写真では視点が大きく異なる。組写真は全体(複数枚)としての表現。大事な何は撮りたいかである。綺麗だから、迫力があるから、ただ撮るのではなく組写真を意識しての取り組

み、この積み重ねが生きてくる。机上論だけでなく現場へ出て実践の繰り返し、“失敗は肥し”これが結果を生むと私は信じている。技術的なことは実践で身に付けることが可能である。

テーマ・タイトルは簡単明瞭にしたい。作品内容が追いつかずタイトル負けする方もいる。テーマ・タイトルも作品の一部となる。組写真の審査では如何にすぐれた作品であっても審査員の考え方によって結果が左右されることもある。自身の想いでテーマに沿った何かを訴え掛けるような作品創りを目指したい。超有名な山域での作品創りは大胆な切り口も必要となる。

“写った写真”と“写した写真”。後者でありたい。

【つなぎの写真とは・・・】 迫力のある写真、ピークの写真、素晴らしい朝焼けや夕映え等の写真を並べただけでは組写真にはなり難いこともある。つなぎの写真とは、単写真としては使い難いがテーマで核となる写真を引き立てるような役目をする写真である。例えば部分的な切り取りの写真で変化を持たせ他の写真を引き立たせる。仰ぐ・俯瞰する等角度を変えての写真、縦位置の写真等、これらを疎かにしない。2枚組から数十枚組、個展・写真集、等々、枚数が多くなればなるほど息抜きや遊び心も必要で重要になってくる。

例えば、三枚組で二枚は決まったがあとの一枚が決まらずにまともにならない方が多くいる。そこでつなぎの写真が重要になってくる。何気ない被写体にも目を向けての取り組み、迷えば迷う程決まらなくなってくるが、予備等は考えず思い切った決断も実力の内だと思う。

【感謝】 以上が私の組写真に対する想い、それを実践してきたことの一部です。少しでも参考にさせていただければ幸いです。

これまで選抜展『それぞれの山』を連続して14回開催し、会の内だけでなく外部の方々からも一定の評価をいただいたのも、これもひとえに皆様方のご理解、ご協力、ご支援のたまものと感謝しております。また、運営に携わってきた方々には大変お世話になり厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。